

れて、人類生態学者として適応・進化してきている様子を見ることができる。

ただし、このような研究姿勢でいると、過去の自分の研究成果を、将来の自分の成果が上書きしてしまうということも起こりうる。例えば第3章では、フリの農耕が連作障害を起こさずに長期間続けられる仕組みを在来知識から分析したが、その後の5章でGIS・リモートセンシングの結果からは休閑期間の短い集団のほうで農耕生産性が低い（つまり連作による栄養低下があると推察される）ことを見出した。また第7章までは人類の生存をエネルギーと栄養素の摂取と消費というバランスから分析しており、人々が生産して口にする食料をみてきた。しかし、第8章以降、腸内細菌の働きによって、口にするタンパク質以外にも、腸内で生み出されるタンパク質があることを調査し、それこそが人々の筋肉質な体型の元になる可能性を論じた。新しい知見を得てから、過去の発見をふりかえると、どのように新解釈できるのかは、明示されていない。

しかし、このように過去の研究成果を自ら塗り替えていくことは、人類生態学やその他自然科学の視点に立った地域研究にとっては決してネガティブなことではなく、むしろ自己の研究の幅を広げ、科学を進展させることに貢献したというポジティブなことである。従来の人類生態学と腸内細菌の研究を結ぶ研究は、今後大きな発見につながっていくことであろう。

本書は、生態人類学会が刊行するシリーズ「生態人類学は挑む」におけるモノグラフの一冊である。同シリーズでは、生態人類学会から発表されてきた様々な研究が出版されている。中でも本書は、重厚な人類生態学の成果であること、先端的な科学を積極的に取り込んできたことが特徴であるが、同時に研究者がフィールドで悩み、知恵を絞りながら、貴重なデータを収集してきた生々しさが描かれる点が貴重である。人類生態学、あるいは生態人類学にかかわる、広い読者によって、長く読み継がれる一書となるであろう。

（古澤拓郎・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

籠谷直人；川村朋貴（編）、『近代東南アジア社会経済の国際的契機』臨川書店、2023、387p.

18-20世紀前半のジャワ都市社会と貿易を論じる本書は、編者の一人である籠谷直人が代表を務めたジャワ海港都市社会経済史に関する共同研究の成果の一環である。以下、まず本の構成を示した後に各章を紹介する。

総説（籠谷直人・川村朋貴）

第1部 港市から植民都市へ

- 第1章 近代植民都市バタヴィアの誕生（植村泰夫）
- 第2章 近代植民都市バタヴィアと後背地（植村泰夫）
- 第3章 「マラリア撲滅」を目指して——蘭印植民地期の工学の進展とバタヴィアの水環境改善——（笹本浩子）
- 第4章 20世紀前半期のジャワの社会統合と現地人妻妾——インドネシア民族主義者の「混淆婚」観をととして——（弘末雅士）

第2部 華僑・華人ネットワークの中のジャワ

- 第5章 17-19世紀、バタヴィア華人コミュニティの形成と変容（城山智子）
- 第6章 20世紀初頭バタヴィアにおける客家系華商の台頭——神戸・香港を繋ぐ梅県潘氏を中心に——（陳來幸）
- 第7章 ジャワにおける包種茶の普及と華人流通網——20世紀前半期の台湾籍民の活動を中心に——（工藤裕子）
- 第8章 1930年代バタヴィアにおける日本製綿布の流通と華僑・華人商人（泉川普）

第3部 国際経済体制下のジャワ

- 第9章 オランダ東インド会社とバタヴィア——18世紀バタヴィアにおけるオランダのアジア域内貿易と本国貿易——（島田竜登）
- 第10章 19世紀中葉のジャワにおける銀流出とシンガポール（小林篤史）
- 第11章 「英蘭型」国際経済秩序におけるイー

スタン・バンクの東南アジア事業展開
(川村朋貴)

あとがき (龍谷直人)

総説では、ごく簡略に本書の目的が示された後に、各部のベースとなる経済史の研究潮流が解説される。

第1章はバタヴィアの近代的植民都市としての発展を、人口変動、都市インフラの整備、カンボン(原住民の居住区)改善事業などから検討する。すでに蓄積のあるバタヴィア史研究のなかで本章の新しさは、都市インフラでも特に給排水、電気事業、交通などに着目し、さらにカンボンの住環境も論じるなど、住民の生活環境とその変容を論じる点である。付属する詳細な数値データも価値が高い。

第2章はバタヴィアとその後背地との関係を考察する。章の前半では市内の地区ごとの職業分布が示され、農業・工業・商業・金融がいかに発展したかが説明される。後半ではバタヴィアと周辺地域および中東部ジャワやジャワ外部とのあいだで行われた具体的な商品のやり取りが示される。周辺地域はバタヴィアで消費する一次産品や労働力を供給し、引き替えにバタヴィアから染織品などジャワ各地の手工業品や中国茶などの輸入品を受け取っていたこと、さらにそうした取引や産業が道路や鉄道の発展により変容したことが明らかにされる。

第3章は、工学史や環境史の視点を取り入れて、バタヴィア史を河川管理から捉え直す試みである。著者によると、バタヴィアはオランダの工学的手法で建設されたが、現地で働くエンジニアは本国とは異なる洪水や堆砂への対処を求められ、現地で得られた知見は本国にも持ち帰られてデルフト工科大などで「湿潤水工学」として発展した。20世紀初頭からは衛生改善事業が重視されて排水路の建設や既存水路の改修が進められ、特にマラリア撲滅を目標にカンボン環境の改善が目指された。この知見はバンドン工科大で「衛生工学」として教授された。

第4章では、蘭印社会におけるニヤイ(正式な婚姻を経ず同棲する現地人女性)の多様なイメー

ジが論じられる。17世紀までに一般化していたニヤイ保有の慣習は、19世紀後半からヨーロッパ人キリスト教関係者に批判されるようになったが、植民地当局はニヤイを持つ有力者たちに気兼ねして規制できなかった。1910年代から民族主義者は現地人女性をニヤイとする非ムスリム華人やヨーロッパ人を非難し、ムスリム有識者は現地人女性がニヤイの身分に陥らないよう女子教育の導入を訴え、社会主義者はニヤイを資本主義にもてあそばれる被害者または苦闘する同胞と理解した。ユーラシアン(ヨーロッパとアジアにルーツを持つ人びと)はしばしばニヤイを「自我を持つ」存在と描き、ニヤイ自身はムスリム男性による女性の不当な扱いを取り上げて彼らの批判に反論した。こうした言説の一方で、1910年代からヨーロッパ人男性と現地人女性の婚姻は増加し、1920年代から30年代半ばには全婚姻の約4分の1を占めた。20世紀前半の蘭印ではニヤイをめぐる統合と分化が同時に生じていたと著者は論じる。

第5章は17-19世紀のバタヴィアの華人コミュニティの形成と変容を、彼らが残した漢文文書に基づいて論じる。17世紀よりバタヴィア華人社会では、オランダ東インド会社に任命されたカピタンとその周囲のエリートたちが公館を形成し、墓地、学校、救済院などの自治運営を行った。19世紀に入ると植民地政庁は新規移民(新客)の流入を制限するようになり、公館は新客の保証人を確保する役割を通じて管理機関として機能した。しかし1840-50年代に中国の開港に伴い新客の流入が急増すると、植民地政庁はより直接的な管理を試み公館の管理機能を弱め、公館の権威は減退した。

第6章はバタヴィアにおける客家商人の活動と日本とのつながりを検討する。20世紀初頭に同地で活躍した客家商人には神戸の客家商人と地縁・血縁関係を持ち、神戸で貿易商の経験を積んだ者が多かった。バタヴィアの客家商人は、公館に代わり華人社会の指導的役割を果たすようになった中華会館(1900年設立)でも重要な役職に就いた。彼らは神戸や横浜と緊密に貿易しただけでなく、子女および故郷の若者を日本に留学させるなどした。こうした客家と日本とのつながりについて

著者は、中国への日本の紹介で知られる黄遵憲が故郷梅県に引退して新学の普及に努めるなど、知日潮流が存在したことを指摘する。

第7章では、ジャワにおける包種茶の普及が論じられる。烏龍茶用茶葉の発酵度を下げて花香をつけた包種茶は、19世紀末に台湾で生産が始まり、20世紀前半から各地に輸出され特に中部ジャワの華人とジャワ人に浸透した。まずジャワの台湾籍民（日本の台湾領有により帝国臣民となった海外在住の台湾系住民）が優遇税制を得て輸入を始め、やがて台湾の有力茶商も台湾銀行や台湾総督府の支援を得てジャワで販売した。台湾籍民は包種茶輸入を契機に華人流通網を仲介し、日本製品の対ジャワ輸出において重用されるようになった。ところが1925年頃から茶の国際価格が下落し輸出入が制限されると、ジャワ在住華人は余った輸出用茶葉などにジャスミンで香りをつけた包種茶を現地生産し、1930年代半ばまでに台湾産を駆逐した。

第8章は1930年代バタヴィアにおける日本製綿布の流通を検討する。バティック（ジャワ更紗）の原料布は、1932年までオランダとイギリス製のキャンブリック（高級晒綿布）が中心であった。しかし主に華人が安価な捺染バティックを生産していたバタヴィアでは、1929年に始まる世界恐慌と1931年の日本の金解禁にともなう円為替の下落の後には、低廉な日本製未晒綿布の輸入がそれらを上回るようになった。1937年の日中戦争勃発をきっかけに日本製品ボイコットが中国や東南アジア各地で広がったが、バタヴィアの有力華人商人には利益を維持するため日本製綿布を販売し続ける者が多かった。

第9章は、18世紀バタヴィアにおけるオランダ東インド会社の貿易を検討する。会社は当初アジア香辛料の本国への輸入を目指していたが、間もなくアジア域内貿易の重要性が高まった。会社船はインド綿織物と東南アジアの錫や香辛料を交換し、南アジアに日本銅をもたらし、ジャワの砂糖を日本、インド、ペルシア（イラン）などに輸出するなどの活動を行った。会社の18世紀アジア域内貿易は銅、錫、綿織物などの庶民向け商品が中心で、世紀後半には本国貿易を上回った。バタヴィアはこうした貿易の重要な結節点であったが、

1730年代からはバタヴィアから広州に錫や胡椒が運ばれるようになり、中国の茶や磁器がバタヴィアを経由せずに直接本国に持ち帰られた。こうしてバタヴィアの本国貿易は減少し、会社の貿易ネットワークにおける中心性を失っていく。

第10章は1850–60年代におけるジャワからの銀流出を検討する。著者は多くの統計を組み合わせ、シンガポールでは銀価格が高い一方で、バタヴィアでは商人がオランダのフローリン銀貨を安く購入できた——植民地との通貨制度統合を試みたオランダ政府がその価格を蘭印ギルダーと等価に（つまりアジアの相場では安く）設定していた——ため、商人はバタヴィアでオランダ銀貨を購入し、それをもとにシンガポールでロンドン宛為替手形を入手して利益を得ていたことを明らかにした。著者はこれを、1848年に始まるゴールドラッシュにより世界的に金安銀高となったことと、シンガポールのイースタン・バンク（イギリス系の民間銀行）が1850年代から活発に為替手形を売買したことから生じた世界史的な通貨システムの転換であったと説明する。

第11章では、イースタン・バンクの東南アジアにおける事業展開が検討される。著者によると、英蘭植民地は1824年のロンドン条約により分断されたのではなく、ジャワでは多くの英系商人が技術や資金を提供し、オランダ商事会社もシンガポールやペナンに進出するなど、相互交流がさかんであった。こうした背景のもと19世紀後半に複数のイースタン・バンクが蘭印ほか東南アジア各地に支店を開設した。最大の業務は為替手形の売買であったが、シンガポールでは華商やチェティヤールなどアジア商人にも融資し、蘭印では英系だけでなく蘭系の会社にも融資してコーヒーや錫、石油など一次産品の輸出拡大に貢献した。著者によれば、こうした幅広いイースタン・バンクの活動は、東南アジアに経済的一体性が現出するうえで重要な役割を果たした。

以上、各章の内容をやや長めに紹介したのは、それらの新規性と価値を伝えるためである。第1章はバタヴィア都市経済を住民の生活環境というローカルな視点から捉え直すものであり、その姿勢は第2章における後背地と都市のあいだで行わ

れた物資や労働のやり取りへの着目と一貫する。第3章は河川工学の視点から都市史を捉え直すだけでなく、植民地と本国で知識や人が行き交いつつ学問が発展するさまを明らかにする点で、スニール・アムリス『水の大陸アジア』の一部を彷彿とさせる。第4章はニヤイの多様なイメージをナショナリズムの進展と結びつけたジェンダー研究であり、第5章は17-19世紀におけるバタヴィア公館の役割と盛衰を彼ら自身が残した資料で跡づける。第6章はバタヴィアにおける客家商人の卓越した役割や、彼らの日本と深いつながりを明らかにする点で、第7章はジャワと台湾の経済的つながりを示す点で、従来のインドネシア史研究にない新しい視点を持つ。第8章は日系、華人系、オランダ系商人など多様なアクターが日本製綿布の取引に関与するさまを描き、第9章では中国と東南アジアにおけるオランダ東インド会社の活動に着目して18世紀のアジア域内貿易を考察する視点が新しい。第10章はジャワの経済問題と考えられていた19世紀の銀流出を世界的に捉え直し、第11章は蘭英帝国を統合的に検討する必要を提起する。読者はこれらを通読することで、当該期の東南アジア社会経済のダイナミズムとその世界史的意味を理解できるだろう。

敢えて苦言を呈するならば、このように斬新な貢献を行う各章を研究史上に位置づける序章が本書に欠けているのはやや残念である。総説では主に貿易史研究で扱われてきた論点を要領よく整理しているが、各章の独自性や編書の視角を明らかにしているとは言い難い。本書のタイトルもまた、各章のテーマや魅力を十分に伝えていないように思われる。

とはいうものの、各部の視点は一貫し、時に連続性のあるテーマを複数の章が扱うなど、本書の編書としての完成度は高い。各章はいずれも東南アジア史で国際的に関心の高い、草の根レベルの都市経済、技術と知、ジェンダー、マイノリティ社会、ヒト・モノ・通貨の越境性といったトピックにおいて世界最先端の水準にある。早急な英訳が望まれる秀作である。

(太田 淳・慶應義塾大学経済学部)

参考文献

アムリス、スニール。2021.『水の大陸アジア——ヒマラヤ水系・大河・海洋・モンスーンとアジアの近現代』秋山勝（訳）。東京：草思社。
(原著 Amrith, Sunil. 2018. *Unruly Waters: How Rains, Rivers, Coasts, and Seas Have Shaped Asia's History*. New York: Basic Books.)

川中 豪；鈴木有理佳。『権威主義的反動と新自由主義——ドゥテルテ政権の6年』日本貿易振興機構アジア経済研究所，2023，iv+125p.

本書は、2016～2022年にフィリピンの大統領を務めたロドリゴ・ドゥテルテの政権運営に焦点を当て、その政策を総合的に検討したものである。本稿は、まず本書の議論を要約して紹介し、そのうえで意義と課題を指摘してみたい。

本書の本論部分は4つの章から構成されており、ドゥテルテ政権を4つの側面から分析する。「第1章 政治——権威主義的反動」では、ドゥテルテ政権を生みだした政治史的背景、支持構造、政権運営の基本的性格が議論される。まず、これまでのフィリピンの民主主義が少数の政治経済エリートによる権力独占と特徴づけられる。1986年の民衆革命以降もフィリピン民主主義の性格は変化せず、ドゥテルテの前任者であるアキノ3世は、この伝統の体現者だったという。ドゥテルテはこのアキノ3世政権を批判することで2016年の大統領選に勝利したとし、この選挙結果は「エリート主体の民主主義のもとでの国家の低い統治能力が生み出す問題への関心によって説明されよう。それは秩序の確立であり、規律ある民主主義の希求であり、それが徹底した違法薬物取り締まりという具体的に目にみえる形で提示されたのだった」(p.9)。さらに著者は、ドゥテルテの主たる支持基盤が中間層以上の階層、高学歴層、若年層にあったと分析し、政権運営の過程で貧困層にも支持を広げていき、政権末期まで異例の高支持率を維持したことを指摘している。また、こうした支持獲得においてソーシャル・メディアが大きな役割を